6 歳児の後悔感情が向社会行動に与える影響
―共感性との関連から―

田口　俊哉

ヒトは発達初期から積極的に他者に利益を与える行動である向社会行動を行う。向社会行動の種類は援助行動，慰め行動，分配行動と様々であり，児は発達とともに多様な向社会行動を身につけていくとともに，互恵性などをもとに助ける相手について選択的かつ戦略的になっていく。

児の向社会行動は，周りの大人からの社会化を促す関わりかけの影響を受ける。児の社会化を促すツールとして道徳的な物語の読み聞かせがあり，他者を助けなかったことで登場人物にネガティブ感情が生起するという内容が児の分配行動を増加させることがわかっている。本研究では物語における登場人物のネガティブ感情として後悔感情に着目し，自身の行動によって他者にネガティブな結果が生じたときの後悔である対人的後悔，自分自身にネガティブな結果が生じたときの後悔である個人内後悔に分離し，特に対人的後悔と分配行動の関連を調べることを目的とした。

大人から社会化を促されるといった環境要因だけでなく，児が元々備えた特性である個体内要因もまた，向社会行動と関連していると考えられる。本研究では，個体内要因として特に共感性に着目し，対人的後悔や分配行動との関連を調べることを目的とした。

本研究では，未就学児における対人的後悔，共感性，分配行動のそれぞれの関連を示した上で，対人的後悔は共感性を介して分配行動に影響しているのではないかという仮説を立て，その可能性を検討することを目的とした。

本研究は，認定こども園の年長クラスの 6 歳児 28 名（男児 12 名，女児 16 名，平均年齢 73.50±3.40 ヵ月）を対象とした。実験の実施期間は 20××年 11 月 9 日から 20××年 12 月 11 日までであった。

各児に対し以下の課題を実施した。児の言語能力が共感性や物語の理解に影響を与える可能性を考慮し，児の言語能力を測る課題として絵画語い検査を行った。また，児の共感性を測定するため，他者の情動に対する同期的な反応である情動的共感を測る痛み課題，他者の視点を取得し，他者の情動や心的状態を推測する反応である認知的共感を測る心の理論課題を行った。その後，登場人物に対人的後悔感情が生起する物語の読み聞かせを行い，児は登場人物の対人的後悔を評価した。以上の課題を行った後，見知らぬ他者に対する児の分配行動を測定した。

本研究の結果，①対人的後悔と分配行動が関連する，②対人的後悔と共感性が関連する，③共感性と分配行動が関連することがわかった。以上の 3 点をもとに，共感性が対人的後悔と分配行動の関連を媒介しているのかを調べるために媒介分析を行った。その結果，対人的後悔から分配行動へのパスは共感性を介すと有意でなくなり，対人的後悔から分配行動への影響に対する共感性の間接効果が認められた。

本研究の結果から，物語の読み聞かせにおいて児に対人的後悔が強く生起すること自体が後の分配行動につながっているのではなく，そこに児自身が元々持つ共感性が伴うことで分配行動に影響していることがわかった。本研究によって，道徳的な物語の読み聞かせによって児の社会化を促すことは，それ自体で向社会行動を増加させるのではなく，共感性といった児の個体内要因によってその影響が左右されるという心理的プロセスを明らかにすることができた。（比較発達心理学）